

5) CF で発見された終末回腸原発悪性リンパ腫の1例

鹿嶋 雄治・佐藤練一郎 (秋田組合総合病院 外科)
 香山 誠司・宮崎 賢一 (秋田組合総合病院 師岡長)
 佐伯 重昭・福田 二代 (秋田組合総合病院 内科)

胃を除く消化管原発の悪性リンパ腫は、腸重積症やイレウスなどの腹部症状を伴い、無症状で発見されることは希であるが、我々は無症状ながら偶然行った大腸ファイバーにて終末回腸原発の悪性リンパ腫を診断、治療したので報告する。症例は79才の男性で3年前に直腸潰瘍の既往があり、follow up CFを行ったところ Bauhin 弁から 3cm の回腸に隆起性病変を認め、同部よりの biopsy で Diffuse lymphoma, large cell type の悪性リンパ腫と診断した。その後の精査にて臨床病期は Stage 4 であったが右半結腸切除術を施行した。術後 VEPA 療法を行い、16カ月間完全寛解の状態にある。

6) 低異型度進行大腸癌の臨床病理学的特徴

片桐 耕吾・渡辺 英伸 (新潟大学第一)
 味噌 洋一・本間 照 (病理学教室)

大腸腺癌は構造異型から高分化型、中分化型、低分化型に分類されるが、当教室では細胞異型に注目し、大腸腺癌を高異型度と低異型度とに分けることを提唱してきた。今回、外科的切除された高分化低異型度進行癌10病変 (pm 癌3例, ss 癌7例), 高分化高異型度進行癌30病変 (pm 癌9例, ss 癌21例) を用いて高・低異型度癌の生物学的態度、肉眼形態の特徴を比較検討した。低異型度癌は高異型度癌に比べ静脈侵襲能 (0%/40%), リンパ節転移能 (12.5%/28.6%) が低く、細胞異型度は癌の生物学的態度を反映すると推定された。また低異型度癌は高異型度癌に比べ隆起型 (70%/27%), 粘膜模様類似の表面性状 (60%/13%) を呈する傾向にあった。

7) 新潟県内大腸癌調査報告

島田 寛治 (県立柿崎病院 外科)
 筒井 光広 (県立がんセンター 外科)

1987, 1988 年に引き続き 1989 年の新潟県内の大腸癌症例の調査を行い、1,365 例を登録した。

手術例は 1,235 例、内視鏡的摘除のみの例は 130 例であった。男性対女性は 727 : 638 例、単発結腸癌は 771

例、直腸癌は 558 例であった。今回の調査では結腸癌も (男 403 : 女 368), 直腸癌も男性が多かった (男 301 : 女 257)。右側結腸癌 (C, A, T) の症例は女性が多く (男 174 : 女 209), 左側結腸癌 (D, S) は男性が多かった (男 173 : 女 129)。右半と左半では前回と同様右半が多く (右. 383 : 左. 302), 直腸は 43% にとどまった。

人口 10 万人対の粗罹患率は 25.4 ~ 85.2, 平均 55.1 (1989), 男 60.4, 女 50.0 であった。前年に比し、5 ポイント上昇した。年齢訂正頻度では新潟市が有意に高く、糸魚川圏が有意に低かった。他府県との比較も行い、新潟県の罹患率の高いことを強調した。

尚、本研究は新潟県病院局の特殊学術研究費によってなされた。

主題「潰瘍性大腸炎の外科治療」

1) 当科における潰瘍性大腸炎の外科治療

名村 理・八木 伸夫
 岡村 直孝・若桑 隆二 (長岡赤十字病院)
 田島 健三・和田 寛治 (外科)

当科では、過去12年間に2例の潰瘍性大腸炎症例に対し3期分割手術によるW型回腸囊肛門吻合術を行ない良好な結果を治めた。1例は、慢性持続例、他の1例は巨大結腸症の症例であった。第1期周手術の白血球数、 α_2 -gl, γ -gl, CRP に注目してみると術前の保存的療法によって手術時には、両症例で低下しており血液学的には、炎症の消退期にあったと考えられた。このことから、保存的療法で炎症を可及的に鎮静化し、時期を逸せず分割手術を行うことにより潰瘍性大腸炎の外科的治療が、良好な結果をもたらすと思われた。

また、両症例とも第3期手術終了後の排便機能は良好で、日常生活に及ぼす障害も認められず、高い quality of life が得られた。以上よりW型回腸囊肛門吻合術は、潰瘍性大腸炎の外科治療において quality of life の点からも優れた術式であると思われた。

2) 潰瘍性大腸炎に対するW型回腸囊肛門吻合術 (シネ)

島山 勝義・島村 公年
 酒井 靖夫・須田 武保
 武藤 輝一 (新潟大学第一外科)

潰瘍性大腸炎に対する結腸全摘術、直腸粘膜切除術、回腸囊肛門吻合術は炎症の再燃や悪性化の危険性のある

大腸粘膜の完全切除ができ、かつ永久的人工肛門が避けられる術式として近年広く行われるようになってきている。術後の排便機能の改善を目的としてS型、J型、H型、W型、Kock pouch など各種回腸嚢が報告されているが、私共の教室では1984年より容量と横幅が期待できるW型回腸嚢を作製しての再建を行ってきた。手術は2期又は3期の分割手術を行っているが、今回は第2期目のW型回腸嚢肛門吻合術の術式をシネで供覧した。術後成績については次演者が発表したが、満足しうる結果が得られている。

3) W型回腸嚢肛門吻合術後の排便機能

山井 健介 (県立加茂病院外科)
 島村 公年・畠山 勝義 (新潟大学第一外科)
 武藤 輝一

潰瘍性大腸炎18例、家族性大腸腺腫症3例にW型回腸嚢肛門吻合術を施行し、術後の排便機能を評価した。臨床スコアを算出し排便状態の経時的变化を評価するとともに、直腸肛門内圧検査、回腸嚢造影を行ない以下の知見を得た。1) 臨床スコアは経時的に増加改善した。2) 1日排便回数は回腸瘻閉鎖後6, 12, 24カ月でそれぞれ 4.3 ± 1.2 , 3.8 ± 1.2 , 3.3 ± 1.0 行と満足のいく結果を示した。3) 回腸嚢最大耐容量と1日排便回数との間に有意の逆相関が認められた。4) 回腸嚢の横径及び拡大率は正常直腸のそれらに比し有意に大きく、1日排便回数との間にもそれぞれ有意の逆相関が認められた。したがって、回腸嚢の最大耐容量、横径、拡大率は排便機能を良く反映し、容量、横径がともに大きなW型回腸嚢肛門吻合術の有用性が示唆された。

4) 回腸嚢肛門吻合術後の quality of life と術後合併症

島村 公年・牛山 信
 岡本 春彦・太田 一寿
 遠藤 和彦・須田 武保
 酒井 靖夫・畠山 勝義
 武藤 輝一 (新潟大学第一外科)

回腸嚢肛門吻合術を施行した潰瘍性大腸炎22症例(W型21例、J型1例)を対象に術後の quality of life と合併症について検討した。1日平均排便回数は 4.3 ± 1.3 回であり、総合的にもほぼ良好な排便機能が保たれていた。日常生活では、食事や飲酒に多少の制約を認めるものの、日常の外出や旅行に制限はなく、術前有職者全員

が就業していた。吻合部縫合不全、肛門腔瘻を各々1例経験しているが、いずれも保存的あるいは手術で治療しており、その他、排尿障害や性機能障害は認められなかった。妊娠、出産の希望もあり、患者の高齢化後の排便機能とともに今後の課題と考えられた。

5) 潰瘍性大腸炎に合併した大腸癌の2切除例

山本 睦生・斎藤 英樹
 桑山 哲治・藍沢 修 (新潟市民病院)
 丸田 春吉 (第一外科)

潰瘍性大腸炎の癌化例は国内でも近年増加の傾向にあり、当科でも最近2切除例を経験したので報告する。症例1は23才女性で、8年間の加療の後盲腸癌、下行結腸癌を発見し、結腸全摘術を施行した。進行度はH₀P₂, C, 3型, 4.0×6.5 cm, Poorly>Sig, s, ly₃, V₀, D, I型, 2.5×2.3 cm, Well>Mucinous, Pm, ly₀, V₀であった。穿孔による骨盤膿瘍を形成しており、真菌血症などのため術後7ヶ月で死亡した。症例2は52才男性で、血便を2年間放置した後、腸閉塞症となり緊急入院し、直腸癌を合併した潰瘍性大腸炎の診断で大腸全摘術を施行した。進行度はH₀P₀, Ra>Rb, 4型, 3.5×5.0 cm, Well, s, ly₃, V₁であった。術後多発小腸穿孔にて再手術施行し、術後1年経過観察中である。癌化の問題や、手術方法の進歩により、今後は難治例や経過観察が十分に行なえない例では、積極的に切除の方向へ進むべきかもしれない。